



静脩

1980年4月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 17, No. 1

新入生諸君へ！

○入学おめでとう

共通一次2年目の今年の4月、難関を突破して京大に入学された諸君に、附属図書館（以下本館という）より心からのお祝いのあいさつをお送りする。

昔は、進学しようとする大学を選ぶひとつの要素として、その大学の図書館と蔵書を考慮にいったという話が伝えられている。「京大に入ったら、あそこの江戸期の浮世草紙や、馬琴、京伝などを手にとって読んでやろうと期待した」という意味のことを菊池寛（大正5年本学英文学卒）は自伝に書いている。

講義は勿論、ゼミ、実験のスケジュール過密化によって、諸君には、そのようなのんびりした話しは通用しなくなったかもしれない。しかし、折角京大の門をくぐられたのであるから、明治30年（1897）の開学以来、80年にわたって蓄積され、育てられてきた本館を始めとする全学の図書を最大限に利用してほしいものである。図書館員や、本について多少の知識をもつ人は、京大の蔵書が、質量ともにわが国図書館界屈指のものであることを知っている。現在、京大全域で所蔵されている図書数は、約380万冊となっているが、その質の方を端的に表現することは実にむずかしい。これを代表するものとして、本館が所蔵する貴重書の中には、重要文化財に指定されているものが、37種含まれているということを記すにとど

めておく。

○図書の利用について

もちろん、上記の多数の図書が本館だけに集中して所蔵されているのではなく、各学部、研究所、さらには南紀白浜の理学部附属瀬戸臨海実験所、北海道標茶^{シベチヤ}の農学部附属演習林、南国鹿児島^{シベチヤ}の防災研究所附属桜島火山観測所などの図書まで含まれているのであって、その中で諸君が最も気兼ねなく利用できるのは、本館の約50万冊と、教養部図書室の約35万冊であるが、さらにその中の「開架図書」と呼ばれ、直接本棚の前までいって自由に手にとることのできるものが、両図書館にそれぞれ3万冊ずつ置かれている。中味は教養書、一般学習図書、指定図書と呼ばれているもので、大部分が新刊書であり、各専門分野の教官により選定されたものである。現在学生諸君の利用の大部分はここに集中しているといえよう。なお、館内の閲覧だけでなく、家や下宿へ借りて帰って読みたい諸君は、何十万冊という書庫内の図書を簡単な手続きで借出せるし、「開架図書」も1週間1冊ずつなら借り出せることをつけ加えておく。

上記両図書館以外の各学部・研究所にも立派な図書室があり、大部分は簡単な手続きで利用することができる。本館を含め学内すべての図書（館）室の利用については本館の「図書館利用案内」に要領よく記事が載せてあるので是非一読していた

だきたい。なお本館の2階の参考室カウンターには常時職員を配置し、図書館（室）及び図書の利用に関するあらゆる質問を待っているし、1階にある全学総合目録（カード）により必要とする図書が学内のどの図書（館）室にあるかが一目でわかるようになっている。かくしてできるだけ多くの図書をうまく利用する技術を一日も早く自分のものにしてほしいと願うものである。諸君の京大生活の充実度は、本学の図書施設を如何にうまく利用するかによって相当に左右されるものと確信しているからである。

○附属図書館の施設について

さて、本館の建物は、御覧の通り大変古ぼけており、他大学に比べて遜色がない、とはお世辞にもいえないだろう。何しろこの建物は、太平洋戦争の始まった昭和16年に起工され、戦争中は物資不足のため工事中止、戦後の昭和23年にやっと完成したものである。以後30年、激増する図書、雑誌などの情報資料を蒐集し、学生や教官に対して効率よく提供するという現代的図書館の任務を十分に果たすことは、年毎に困難の度を加えているというのが実情である。しかし、そのような状況の中でも、本館は諸君の学習室としての役割りを

も果たすべく、冷房装置の設置、「開架図書」の充実拡大にも力をいれてきた。また文献複写室、雑誌室、新聞閲覧室を設け、さらに参考室には、内外の書誌、目録、索引、辞書、事典、年鑑、ハンドブック類を網羅して諸君の自由な閲覧に供している。

なお、2階大閲覧室の「開架図書」の中に「指定書」と呼ばれる図書があることは、前にも述べたとおりであるが、これは各学部の教官により、是非読んで欲しいという意味で指定されたものである。一方、諸君が「どうしてもこの本を備えて欲しい」と希望するものがあれば、所定の用紙に記入して提案することができる。朝9時から夜9時まで、本館を大いに利用していただきたい。

○おわりに

現在、本館をもっと利用し易く、現代の情報化時代にマッチしたものに建てかえようという動きが推められているが、諸君が3・4年生になり、或は大学院生になって、各専攻学部の図書室を利用することになっても、本館をいつでも利用できることを附言しておきたい。

西 欧 の 大 学 図 書 館 建 築 印 象 記

京都大学附属図書館 整理課長 倉 橋 英 逸

一昨年暮、西欧では英国と西ドイツの大学図書館を視察したので、その大学図書館建築について素人の印象を簡単に述べたい。

英国のロンドン郊外にあるオックスフォード大学は、大学全体が保存建物に指定されており、外観の変更は許されていない。この大学の中央図書館であるボードリアン図書館は、戦後、蔵書の増大によって増築の必要を迫られたが、周囲に建物があり、隣接して新館を建てることができなかった。そこで、建物をつつ挟んで新館を建て、これと旧館とを地下にベルト・コンベアで結び、旧館を閲覧室、新館を書庫として利用している。

一般に西欧人は息が長く、グリムの独語辞典や

フランス国立図書館の蔵書目録が19世紀からABC順に継続して刊行されているのと同様に建物の耐用年数に対する感覚も我々日本人と較べて比較にならない程長いように思われる。西欧の都市の街を歩いていると、公共的な建物だけではなく、民間の建物に於いても、古い建物を改装していつまでも大事に使っているのが見受けられるが、オックスフォード大学のボードリアン図書館も1602年に建てられて以来、400年近くも現役で働いていることになり、驚くほかない。

新しい大学図書館建築としては、スコットランドのエディンバラ大学の中央図書館が1967年に建てられ、地上7階、地下1階、総面積約3万平方